

学生会員沖縄地区研修2023

沖縄地区研修2023事務局

少子高齢化に伴う各業界の担い手不足は、防衛施設の建設分野においても例外ではない。我が国の安全保障基盤の構築を担う将来の若手技術者の育成が急務の課題である。

(一社)防衛施設学会では、令和元(2019)年度から学生会員に対するスカラシップ制度の創設に向けた取り組みを開始しており、その一つとして次代を担う若者の安全保障意識を涵養し、防衛基盤の育成に寄与する観点から、学生会員を対象とした現地研修を行っているところである。

学生会員6名が沖縄地区を实地研修

令和元年度から学生会員を対象とする現地研修を開始し、初回は3名の参加者をもって実施したところであるが、新型コロナウイルス感染症が拡大していた令和2(2020)、3(2021)年度は実施を中止せざるを得なかった。移動自粛措置が緩和された令和4(2022)年8月に諸条件を付加し、9名の研修参加者をもって3年ぶりに再開されたところである。

令和5(2023)年度は、5月8日に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の分類が2類から5類に変更されるとの報道を受け、4月から学会ウェブサイトを通じて学生研修2023の研修員の公募を開始したところ、各地の学生会員から多くの応募があり、5月下旬に9名の研修員を内定した。その後3名が大学院の入試日程と重複することから辞退し、最終的に6名が研修に参加した。

沖縄地区研修2023

沖縄本島には陸上・海上・航空自衛隊の駐屯地・基地、在日米軍基地が近在して所在するため、比較的短時間でこれら施設の訪問研修が可能であることから、今回も沖縄地区が

研修先として選ばれたものであり、防衛省沖縄防衛局、陸上自衛隊第15旅団、海上自衛隊第5航空群、航空自衛隊南西航空方面隊、合衆国空軍第18施設群、SAME Japan Postの協力を得て、令和5(2023)年8月22・23日に学生会員沖縄地区研修2023を実施した。3回目となる今回の研修において、初めて地元沖縄県内在住の2名の学生が参加し、本州からの参加者との意見交換の場ができた。

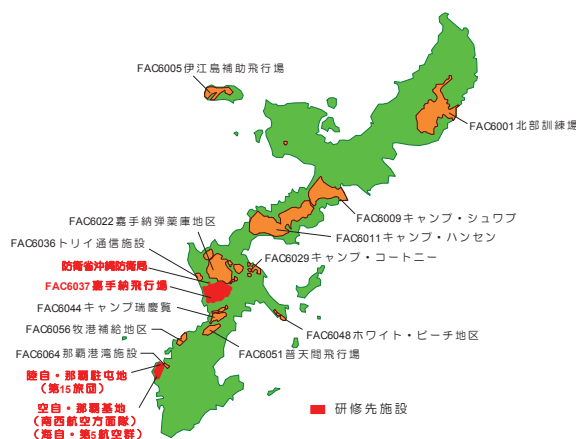


図 沖縄本島内の主要防衛施設と研修先の位置関係

■第1日目 8月22日

研修初日の8月22日午前8時20分、那覇新都心のおもろまち駅前ロータリーに集合した6名の研修生及び引率の研修団長 高橋理事と学会事務局同行者は、本研修最初の研修先である防衛省沖縄防衛局に向かった。

➤沖縄防衛局研修

沖縄防衛局¹⁾ 玄関で報道室担当者の出迎えを受け、案内された講堂で学会事務局から研修のオリエンテーリング、諸注意事項の説明、研修員の自己紹介等が行われた。

嘉手納基地近隣地に所在し、沖縄県全域を担当する防衛省の地方支分部局である沖縄防

衛局では、総務課長から沖縄防衛局全般業務の概要を、地方調整課長から沖縄県内における米軍施設・区域の返還への取り組み状況、南西諸島への警備部隊等の配備計画を、調達部次長から南西諸島への自衛隊の部隊配備の為の工事状況への取り組みについて、約1時間説明が行われた。(写真-1・2)



写真-1 防衛省沖縄防衛局玄関前にて(中頭郡嘉手納町)



写真-2 沖縄防衛局研修風景

沖縄防衛局研修により、南西地域の厳しい現状と防衛施設の概観について研修生の理解が進んだものと思われた。

➤合衆国空軍嘉手納基地研修

沖縄防衛局の研修終了後、嘉手納基地²⁾ 第1ゲートに向かい、SAME Japan Postの協力により、Kadena Air Base Pass and ID Officeにおいて臨時入門申請を行い、第18施設群(18th Civil Engineer Group: 18 CEG) 第718施設中隊(718th Civil Engineer Squadron: 718 CES) アンチェ少尉(Lt. Earnhardt Anche) 等のエスコートで嘉手納基地に入門した。

なお、顔写真付公的ID(運転免許証、マ

イナンバーカード、パスポート)を有しない学生1名については、嘉手納基地側と事前調整を実施したものの残念ながら嘉手納基地への入門が認められず、担当幹事のエスコートで航空自衛隊恩納分屯基地を研修した。次回以降、米軍基地訪問を伴う研修等には、応募時点においてIDの取得状況の確認が必要であることが痛感された。

第5空軍(横田)の管轄下にある嘉手納基地は、沖縄県中頭郡嘉手納町・沖縄市・中頭郡北谷町にまたがり、総面積は約19.86km²、3,700mの滑走路2本を有する極東最大、在日米空軍最大の基地であり、基地内には各部隊の施設と住宅施設が所在し、12か所の交通信号機が設置されるなど、研修生諸氏は嘉手納基地の広大さを実感したようであった。

嘉手納基地到着後、基地内の将校クラブで18CEG、SAME Japan PostメンバーとToday's Special, Mexican Lunch Buffetsを共にし、米国流の昼食時間を楽しんだものと思われる。(写真-3・4)



写真-3 将校クラブMexican Lunch Buffets



写真-4 将校クラブでの昼食

昼食後、同クラブ内において、718 CES フォント少佐(Maj. Benjamin Fonte)の歓迎挨拶、

news

アンチェ少尉から嘉手納基地の概要、18 CEGの任務等について説明を受けた。18 CEGは、450人以上の軍人と約1,000人の軍属等を擁し、18 CES、718 CESの2個中隊で構成されている米空軍最大の施設部隊で、嘉手納基地内施設の爆発物処理、消防、緊急サービス、環境保護、保守及びごみ処理契約、沖縄本島全体の米軍住宅及び住宅保守、基地インフラの管理を任務としているという。(写真-5・6)



写真-5 718 CESフロント少佐の歓迎挨拶



写真-6 嘉手納基地、第18施設群の概況説明

概況説明の後、場所を移して爆発物処理班(18 CES Explosive Ordnance Disposal Flight: EOD Flight)、即応緊急事態管理班(18 CES Readiness and Emergency Management Flight: Dirt Boys)の装備品の展示説明を受けた。

敵の攻撃により破壊された滑走路の応急復旧は、爾後、戦力発揮の基盤として作戦用航空機の離発着を可能にさせるために重要であり、これらの部隊は滑走路の応急復旧を行う部隊で、EOD Flightが残存爆発物の探知、除



写真-7 EOD装備品・爆発物探知機器の体験



写真-8 被害応急復旧資材の見学

去処理を行い、その後Dirt Boysが応急被害復旧を行うとのことである。各研修員は、初めて見る機器に興味深く説明を受けていた。

その後、① Airfield Damage Repair Storage Facilities、② Demolition Project、③ Spalling and Major Repair Viewing、④ Housing Project、の各建設現場を訪れ、718 CESの担当者から説明を受けた後、⑤旧日本軍の桜花掩体壕群を車窓から見学し、嘉手納基地を後にした。(写真-9参照)



写真-9 嘉手納基地内の見学現場の位置
(図中の数字は見学施設の概略位置、Google Earthから転載)



写真-10 718 CES事務所前にて

第2日目 8月23日

第2日目も前日と同様におもろまち駅前に集合し、那覇空港に隣接した陸海空の三自衛隊が所在する那覇駐屯地、那覇基地を研修した。

➤陸上自衛隊那覇駐屯地研修

陸上自衛隊那覇駐屯地に到着後、第15旅団³⁾司令部庁舎前にて記念撮影。その後、広報資料館「鎮守の館」において、広報展示の説明を受けた。



写真-11 第15旅団司令部前にて

「鎮守の館」には、15旅団の沿革、沖縄戦、美ら島の護り、日米の絆、災害派遣、緊急患者空輸、不発弾、戦史模型の8つのテーマに亘って多数の資料が展示されており、研修者は興味深く広報担当者の説明を聞いていた。

なかでも部隊で製作された沖縄戦史のジオラマは、米軍上陸から沖縄戦終結までの戦線の推移状況が時間軸で分かりやすく理解できる秀逸なもので、国内最大の地上戦といわれる沖縄戦の状況について研修生の理解が深まっ

たものと思われた。

また、沖縄戦の負の遺産の一つとして、沖縄戦で使用された不発弾の処理の現状に関する第101不発弾処理隊長の説明に対して研修生の関心は高く、戦後の現在も年間平均約15t、約600件の不発弾を処理している状況に研修生は驚いていた。(写真-12・13)



写真-12 不発弾処理隊長の説明(広報資料館「鎮守の館」)



写真-13 第15旅団広報渉外班員による説明(広報資料館「鎮守の館」)



写真-14 第15施設隊の装備品展示説明

その後、訓練場地区に移動し、第15施設隊の持つ施設装備品を見学した。第15施設隊は、陣地構築、障害構成、障害処理、交通作業、渡河作業といった施設作業を実施する旅団唯一の施設科部隊であり、オペレーターから各種施設器材について説明を受けた。(写真-14)

➤航空自衛隊那覇基地研修

陸上自衛隊研修の後、航空自衛隊と海上自衛隊の活動拠点である那覇基地に向かい、航空自衛隊研修が実施された。

第9航空団司令部渉外室会議室において第9航空団から航空自衛隊那覇基地⁴⁾の現状や役割、南西域における航空自衛隊の活動状況等についての概況説明を受けた。近年、中国の活動が活発であり、各方面隊区の中でも特に南西域における緊急発進回数が突出している状況説明に、研修生は改めて国際環境の厳しい現実を理解したようである。(写真-15)



写真-15 第9航空団の概況説明

概況説明の後、隊員食堂で隊員と同一メニューの部隊食を体験喫食した。

昼食、厚生施設見学の後、エプロン地区に移動し、航空自衛隊の主力制空戦闘機である第9航空団のF-15J戦闘機、那覇救難隊の搜索救難機UH-60J、U-125を見学、パイロットから機体や装備品の説明を受けた。実運用の機体を間近に見学する機会は限られることから、研修生の関心は高く、多くの質問が出され、説明者は、質問に対し簡明かつ丁寧に答えていた。(写真-16・17)



写真-16 F-15J戦闘機の説明（航空自衛隊第9航空団）



写真-17 救難搜索機の説明（航空自衛隊那覇救難隊）

➤海上自衛隊那覇航空基地研修

航空自衛隊研修の後、本研修の最後の研修地として海上自衛隊那覇航空基地⁵⁾群庁舎地区へ移動し、海上自衛隊の広報ビデオを視聴して海上自衛隊に対する理解を深めた後、哨戒機P-3Cを運用する第5航空群司令部から南西諸島地域の現状、第5航空群の任務や活動状況に関する概況説明を受けた。

その後、エプロン地区へ移動し、第5航空隊のP-3C哨戒機を見学。今回初めて機内の見学が許可され、クルーから機体の説明を受



写真-18 海上自衛隊第5航空群による概況説明

けた。

戦闘機の見学と同様、自衛隊の装備品に関する研修生の関心は高く、クルーに対し多くの質問が出されていた。(写真-18・19・21)



写真-19 エンロン地区でP-3C哨戒機を見学



写真-20 P-3C哨戒機の内部
(米海軍公表写真、Wikipedia⁶⁾ から転載)



写真-21 P-3C哨戒機をバックに（海上自衛隊那覇航空基地）

➤那覇空港で解散

海上自衛隊研修を終了後、那覇基地を退出して那覇空港に移動。研修は空港で解散となり、二日間にわたる慌ただしかった学生会員沖縄地区研修2023は終了した。(写真-22)

研修後に回収されたアンケートには、「不



写真-22 夕刻の那覇空港で解散

発弾処理がどのように行われているか気になっていたが、思ったより多くの処理活動をされており、その中で事故が一件もないのは本当に素晴らしいと感じた。また、不発弾処理の内容についてより知ることができ、有意義な時間となった。」「地上戦を経験した地であることは理解していたものの、どのような戦局を経ていき、当時の市民の様子がどれだけ緊迫していたか、初めて知ることが多く、印象に残りました。」「県民感情として、「米軍」という外国がいることに不快を示していると思っていたが、「基地負担」という観点で自衛隊にも同様の感情が存在しているということを知り、価値観に大きな変化があった。」「国防というと戦略や防衛力整備、あるいは正面装備に目が向きがちであるが、有効に機能するためには、調達、会計、施設整備・維持、あるいは周辺自治体との調整などの「基礎」が強固である必要があることを理解することができた。」という感想があった一方、「自衛隊に詳しくない参加者もいるため、自衛隊の興味関心を持ってもらうために音楽隊などを見学できる機会も設けられるとより良いと思う。」「陸上自衛隊を訪れたとき、沖縄戦や不発弾処理に関して丁寧に説明いただき、その後も航空、海上と"自衛"としてだけでなく、災害時における活用なども含めて学ぶことができた。日本側の現状、活動を知った上で米軍基地に訪れると、また違った感じ方があるので、自衛隊→米軍の順の研修の方が良いのではと思った。」「常に時間が押していた」という今後の研修実施上の課題に關す

る感想もあった。

研修日は両日ともに天候に恵まれ、夏真っ盛りの中での実施となり、事故等もなく無事、研修を終了することができた。

各研修生は、事前配布資料等を基に研修に臨んだものと思われるが、百聞は一見にしかずの諺にもあるように、実地に自衛隊那覇基地、那覇駐屯地、合衆国空軍嘉手納基地を研修したことは、研修生の貴重な体験になったものと思われる。



写真-23 事前配布された各種研修資料

研修生には、成果報告としてレポートの提出を義務付けているところであり、本号 **Contribution** 欄に各研修員のレポートを掲載しているので、本稿と併せて是非一読いただきたい。

なお、アカデミック・フリーダムの観点か

ら、レポートは著作者の主義主張について自由な記述としており、内容、表現等は研修員個人の意見で、当学会の見解を代表するものではないことを申し添える。

MIRAI-25号（2023.3発刊）には「かなりの金額を費やして遠隔地まで行く効果を検証しているのか」との学生研修への批判的な意見も寄せられているが、当学会では、学生会員の安全保障政策、防衛施設技術に関する理解を深めていくための一プログラムとして実施しているところであり、本研修等を通じて研修生諸氏が、将来の我が国の安全保障基盤を担う次世代として成長することを期待したい。

なお、今回を含め過去3回の研修では、研修開始当初には想定してなかった事項が見られたことから、今後必要に応じて改善を行い、より良い研修としていくことが肝要であることは言うまでもない。

謝辞

本研修の実施に当たり、御支援、御協力いただいた防衛省沖縄防衛局、陸上自衛隊第15旅団、海上自衛隊第5航空群、航空自衛隊南西航空方面隊、合衆国空軍第18施設群、SAME Japan Postの皆様に深甚なる謝意を申し上げます。

参考

- 1 沖縄防衛局ウェブサイト、<https://www.mod.go.jp/rdb/okinawa/>
- 2 合衆国空軍・嘉手納基地ウェブサイト、<https://www.kadena.af.mil/>、第18施設群 <https://www.kadena.af.mil/Units/18th-Civil-Engineer-Group/>
- 3 陸上自衛隊第15旅団ウェブサイト、<https://www.mod.go.jp/gsdf/wae/15b/15b/>
- 4 航空自衛隊那覇基地ウェブサイト、<https://www.mod.go.jp/asdf/naha/index.html>
- 5 海上自衛隊5航空群ウェブサイト、<https://www.mod.go.jp/msdf/naha/>
- 6 Wikipedia（P-3C）、[https://ja.wikipedia.org/wiki/P-3_\(%E8%88%AA%E7%A9%BA%E6%A9%9F\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/P-3_(%E8%88%AA%E7%A9%BA%E6%A9%9F))